ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

－第二章－

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

－第二章－

1000450656-B

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

―第二章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第二章　開幕　— The Curtain Raiser —

1

ＭＡＲことマグナ・アタラクシア・リサーチ社は、東アジア地区を代表する巨大企業。医薬品から戦闘機まで手広く研究・開発を手がける、世界有数の魔導産業複合体である。

暁深森は、そのＭＡＲに雇われた医療部門の主任研究員だった。

年齢は今年で三十三歳。しかし二児の母とは思えない童顔だ。美人というよりは可愛らしい顔立ちで、背は高からず低からず。開ききらない瞼のせいで、どことなく眠そうな印象を受ける。伸ばした長い髪はぼさぼさで、タバコのかわりにくわえているのは食べ終えたアイスの棒だった。

私生活がだらしないタイプの大人だと、一目でわかる風貌の女性だ。実際、通勤するのが面倒臭いという理由で、週の大半を研究所に泊まりこんで過ごす程度に、だらしない人物だったりするわけなのだが——

「主任、ちょっとすみません」

そんな深森がめずらしく帰り支度をしていると、若手の研究助手が彼女を呼んだ。生真面目そうな彼の顔には、かすかな焦りが浮かんでいる。

「ふんふー……どうしたの？　アイス食べる？」

「要りません」

私物のクーラーボックスに手を伸ばす深森を冷ややかに制止し、若い助手は早口で続けた。

「廃棄予定だった実験薬の数が合わないんです。書類上では、あと十二ケース残っているはずなんですが」

「ウチで調合した薬なら、そこの端末で位置情報が出るよ。伝票の追跡番号を入れてみ？」

取り出した棒アイスの袋を破りつつ、深森が大雑把な助言を返す。

助手は深森が指示した端末に駆け寄って、必要な情報を呼び出した。幸せそうに棒アイスを舐める上司とは対照的に、助手の顔つきが険しさを増していく。

「位置情報……ありました。これですね。ですが……」

「ふんふ？」

「実験薬のステータスが……出荷済みになってます」

「出荷済み？　廃棄予定じゃなかったの？」

「内容物のラベルが上書きされているんです。配送システムのバグか……いえ、もしかしたら外部からのハッキングかもしれません。ですが……この出荷先は……」

「あらら……これはまた意外なところに……」

青ざめる助手の肩越しに端末の画面を覗きこみ、深森は小さく苦笑した。誤って出荷された実験薬の送り先は、彼女にとって少なからず縁のある場所だったからだ。

「ところで、出荷されちゃった実験薬ってなに？」

何気ない口調で深森が訊いた。助手は深刻な表情で息を吐く。

「タイプＢです。アンテロース・タイプＢ」

「え？　タイプＢって、例のあれ？」

深森が目を丸くした。驚きと好奇心が入り混じったような表情だ。

「はい。通称〝Ｂ薬〟です……」

「あー……それはまずいわね」

「まずいですね」

まるで他人事のような深森の反応に、助手は苛々と首肯する。

そんな部下の苦悩をよそに、深森は悪戯っぽい微笑を浮かべ、

「まあ、今さら慌てても仕方のないことだし、とりあえず……アイス食べる？」

「要りません」

事務的な口調でそう言って、助手はぐったりと項垂れた。

2

矢瀬基樹は教室の片隅で、疲れた身体をぐったりと横たえていた。

その隣では〝第四真祖〟暁古城が、床に突っ伏すような姿で倒れている。土気色に疲弊しきった古城の顔色は、世界最強の吸血鬼というよりは、むしろゾンビのそれに近かった。

「お……終わった……」

握っていた金槌を床の上に投げ出して、古城が弱々しい声を出す。

彩海学園学園祭——通称〝彩昂祭〟の朝である。古城たちが所属する高等部一年Ｂ組の出し物は、お化け屋敷。それも〝魔族特区〟の技術を応用した仮装現実大規模多人数お化け屋敷だ。

矢瀬が実家のコネを使って、廃棄予定だった幻術投影サーバーをタダで借りてきたところまではよかったが、そこで油断したのが失敗だった。サーバーの設置に気を取られている間に、教室の飾りつけや衣装の製作など、肝心のお化け屋敷の準備が遅れに遅れ、結局、昨夜は学校に泊まりこんで徹夜で作業する羽目になったのだ。

「いやー、一時はどうなることかと思ったが、なんとかなるもんだな」

ようやく飾りつけの終わった教室内を見回して、矢瀬が乾いた笑い声を洩らす。時刻は間もなく午前十時。学園祭の開場時刻ギリギリだ。

「ああ、そうだな。これで少しは眠れるか……」

同じく徹夜明けの古城が、満足げに呟いて目を閉じた。暗幕で窓を塞がれた教室内は暗く、仮眠を取るには絶好の環境なのだ。

心地好い疲労感に身を委ね、古城と矢瀬は眠りに落ちていく。そんな二人を乱暴に叩き起こしたのは、彩昂祭実行委員として準備を仕切っていた藍羽浅葱だった。

「こら、そこの二人！　なにサボってんの、寝るなっ！」

「なんでだよ……！　客なんか、まだ誰も来てないだろ」

はたかれた頭をさすりながら、古城が小声で反論する。

「だからお客さんを集めてこいって言ってるのよ。はい、これ。看板とかぶり物」

浅葱はそう言って古城たちの胸元に、客引き用の小道具を押しつけた。

なおも抗議を続けようとした古城だったが、仁王立ちで自分たちを見下ろしている浅葱の姿を見て沈黙する。古風なセーラー服を着た浅葱は、黒髪ロングのウィッグを被って、額にべったりと血糊を塗りつけていた。幽霊役の特殊メイクだと、頭ではわかっていてもかなり恐い。

「あたしだって幻術サーバーの調整で、昨日は一睡もしてないんだからね！　とにかく人手が足りないのよ！　このチラシを全部配り終えるまでは、あんたたちに自由時間はないから！」

「マジか……」

段ボール箱いっぱいのチラシを眺めて、古城は絶望の溜息をつく。矢瀬も同じような表情で、やれやれと肩をすくめていた。

彼らの背後で教室のドアが開いたのは、その直後のことだった。生徒ではない誰かが中をのぞきこんでくる気配を察して、浅葱が愛想よく振り返る。

「あ、いらっしゃいませ。今でしたら十一時からのツアーにまだ空席がありますよ」

「わー、お化け屋敷なんて何年ぶりだろ。楽しそー」

浅葱の呼びかけに答えてきたのは、笑いを含んだ人懐こい女性の声だった。

その声の主を見た浅葱が、驚いたように目を見開く。

「え……!?　深森さん!?」

「なに……!?」

浅葱の言葉を聞きつけて、古城と矢瀬が顔を上げた。しわくちゃの白衣を羽織った童顔の女性が、彼らに向かって朗らかに手を振っている。

「あー、いたいた、古城君。矢瀬っちと浅葱ちゃんも、元気だった？」

「ちっす。お久しぶりっす」

矢瀬が立ち上がって頭を下げた。中学時代からの古城の友人である矢瀬と浅葱は、いちおう深森とも面識があるのだ。思いがけない場所で母親と顔を合わせた古城だけが、居心地の悪そうな表情を浮かべている。

「誰？　浅葱の知り合い？」

「うん。古城のお母さん」

近くにいたクラスメイトの棚原夕歩に質問されて、浅葱が簡潔に説明した。夕歩は、ほほう、と好奇の表情を浮かべつつ、深森をじろじろと不躾に眺めて、

「へー、若いね。そういえば暁の妹さんに少し雰囲気似てるかも……じゃあ、藍羽、とりあえず頑張って。外堀から埋めるのって大事よね」

「は!?　そ、外堀って、なにを……!?」

冗談めかした夕歩の言葉に、不意を衝かれた浅葱が激しく動揺する。

その間も深森は、息子の同級生たちに必要以上に愛想を振りまいており、古城はそれに耐えかねたように、母親を無理やり廊下に追い出した。

「どうしたんだよ、急に。仕事があるから彩昂祭には来ないって言ってなかったか？」

「んふー……これも仕事といえば仕事なのよねー」

古城に問い詰められた深森が、なにやら思わせぶりな口調で言う。

「あ？」

「ほら。MARって、いろいろ作ってるでしょ。お菓子から大量破壊兵器まで」

「……だからなんだよ？　あんたがいるのは医療部門だろ？」

古城が無愛想に訊き返した。たしかにMARには製菓部門もあるが、それは深森の仕事とはあまり関係ないはずだ。

「そうそう、医療部門。その医療部門で実験段階だった薬品が、間違って出荷されてしまったみたいなの」

「ま……間違って出荷された？」

深森が平然と口にした言葉に、古城たちは激しく不安を覚えた。医薬品の誤出荷といえば、それだけでも十分に大問題だ。ましてや深森が絡んでいるとなると、最悪の予感しかしない。

「もともと出荷予定だったお菓子の段ボールに、こっそりまぎれこんじゃったのよね。外部からのハッキングが原因みたいなんだけど」

無責任な口調で深森が続ける。矢瀬は、その説明にピクリと眉を寄せ、

「……ハッキング？」

「あ、あたしじゃないわよ」

浅葱が慌てて否認した。派手派手しい外見からはあまり想像できないが、彼女は人工島管理公社に高給で雇われるほどの敏腕プログラマーなのだ。浅葱ならMARの厳重なセキュリティをくぐり抜けることも可能だろうし、逆に言えば、出荷データを改竄したハッカーは、浅葱に匹敵する実力の持ち主ということになる。

「てか、そんなときに彩昂祭なんかに遊びに来てていいのかよ？」

古城が責めるような視線を母親に向ける。すると深森はにこやかに微笑んで首を振り、

「ううん。そんなときだから来たのよー」

「どういうことだよ？」

「だって商品の出荷先が彩海学園だったんだもん」

可愛らしい口調で深森が告白し、なっ、と古城たちが一斉に息を呑んだ。

「ちょっと待て。実験段階の薬品が、彩海学園の校内にまぎれこんでるってことか？」

「そうそう。学校の事務室に問い合わせたんだけど、今日届いたぶんの荷物の仕分けは、彩昂祭の実行委員が担当してるって言われちゃってー」

「ああ……模擬店用の食材や景品を、大量に買いつけてるからなあ」

矢瀬は冷静に深森の説明を受け止める。古城は青ざめた顔で深森に詰め寄り、

「って、落ち着いてる場合じゃないだろ！　生徒が間違って飲んじまったらどうするんだ!?」

「大丈夫、大丈夫。服用しても人体に害はないから」

「そ、そうか……いや、だけど……」

「で、せっかくの機会だし。薬を飲んじゃった生徒を見つけて効果を確認しようと思ってー」

「罪のない一般生徒を人体実験に使うなっ！」
古城が本気で実の母親を怒鳴りつける。浅葱はますます心配そうな顔で深森を見つめて、
「その実験薬って、どんなお薬なんですか？　見ただけで効果がわかるものなんです？」
「えーっとね、タイプBって名前でー……ひと言で言えば、惚れ薬、かなー」
深森は胸の前で手を合わせ、愉しげな口調でそう言った。
浅葱は驚愕に声を上擦らせて、
「ほ、惚れ薬!?」
「ば、馬鹿、浅葱っ……！」
慌てて浅葱の口を塞ぐ矢瀬。しかし時すでに遅かった。浅葱の絶叫を聞いた一年B組の生徒たちが、一斉に顔を上げてざわめき出す。
「惚れ薬……？　今、惚れ薬って言ったか」
「暁くんのお母さんって、たしかMARで働いてるのよね」
「MAR製の惚れ薬だと……!?　それが校内に出回ってるのか？」
「えっ……えっ……!?」
自らの失言に気づいた浅葱が、おろおろと視線を彷徨わせながらうろたえた。学校内に惚れ薬がまぎれこんでいる、という事実が知られたら、それを手に入れようとする生徒たちによって騒動が巻き起こるのは必然だ。
「あー……保冷！　保冷薬かー！」
「き、気温が高いから食べ物も傷みやすいしねー。保冷剤は大事よねー」
どうにか誤魔化そうと矢瀬がわざとらしく大声を出し、浅葱も必死で話を合わせた。その努力が功を奏したのか、クラスメイトたちは急速に矢瀬たちの会話に興味を失って離れていく。
「惚れ薬の存在を大っぴらにするのは危険だな……気づかれないうちに回収するしかないか」
矢瀬が疲労感を滲ませた口調で呟いた。一般生徒に情報が洩れたら、パニックが起きるのは証明済みだ。なるべく少数の精鋭だけで、迅速に行動するしかないだろう。
「てか、なんでそんなものをMARが研究してるんだよ!?」
古城が囁くような声で母親を責める。
しかし深森は、どうしてそんなわかりきったことを訊くのか、と小首を傾げ、
「惚れ薬は昔から世界中で使われてきたポピュラーな魔術薬品だもの。〝魔族特区〟の企業が研究するのは、むしろ自然でしょ？　これまでは、調合に専門的な知識や特殊な材料が必要で、量産や保存が難しかったのよね」
「いや、それはそうかも知れないけど……」
「もともとは、危険な魔獣や猛獣を、安全に飼育するために使われる予定だったのよ。だけど、ちょっと効き目が強過ぎちゃって、かえって危険ってことで市販化が見送られたってわけ」
「待てこら！　やっぱり普通にやばい薬じゃねーか！」
古城が再び声を荒らげた。本来は魔獣用に開発された薬品――しかも、効果が強すぎて発売中止になったような代物を人間相手に使ったらどうなるか、想像するのも恐ろしい。

「あ……でも、ほら、少子化対策になるかも……！」
ようやく惚れ薬の危険性に気づいたのか、深森が愛想笑いを浮かべて言う。
「アホかっ！　間違って凪沙たちが飲んだらどうする気だ!?」
古城が真っ先に心配したのは、一歳年下の妹の身の安全だった。そんな古城のシスコンぶりに、浅葱たちが生温かい視線を向けてくる。
「まあ、なんにしても、早めに回収したほうが良さそうね」
「仕方ないから俺も手伝ってやるか。うん。悪用されたら厄介なことになりそうだしな」
不自然なほどやる気に満ちた口調で独りごちる矢瀬。浅葱は、そんな幼なじみを横目で睨み、
「悪用って……基樹、あんたまさか、例の先輩に惚れ薬を使うつもりじゃないでしょうね？」
「え？　いやいや、まさか、そんな」
矢瀬が一瞬の沈黙を挟んで首を振る。浅葱が言う例の先輩とは、矢瀬が自分の彼女だと主張している高等部三年生の女子生徒のことだ。
「そ、そんなものは必要ねえな。俺とあの先輩はラブラブだからな」
「どうだか……」
疑いの眼差しを向ける浅葱から、矢瀬はぎこちなく目を逸らす。
古城は、やれやれと舌打ちしながら母親を睨みつけ、
「特徴は？」
「んー？」
深森が、ぱちくりと眠たげな瞼を瞬く。
「惚れ薬の特徴だよ！　粉末なのか錠剤なのか、どんな容器に入ってるのか、とか！」
「ああ、そういうことね。これこれ。これと同じ感じ」
そう言って深森が取り出したのは、銀紙に包まれた焦げ茶色のプレートだった。表面に凹凸の模様が入った、手のひらサイズの固まりだ。
見慣れたその固まりを指さして、古城は呆然と顎を落とし、
「板チョコじゃねーか！」
「試作品だし、適当な型枠がなかったのよ。サイズ的にもお手頃だったし、食べやすいと思って。ほら、お菓子から大量破壊兵器まで幅広く手がけてるのがMARの売りだからー」
「ふざけんなっ！」
大げさに頭を抱えて古城がうめいた。色艶や形といい、触感といい、匂いといい、どこからどう見ても普通の板チョコだ。仮にこれを手に取ったとしても、危険な実験薬だと疑う生徒はいないだろう。
「まずいぜ、古城。この惚れ薬、彩昂祭の実行委員が製菓用にまとめて買い付けた板チョコにそっくりだ。校内のあっちこっちに出回ってる」
「なっ……!?」
矢瀬の冷静な指摘に、古城は今度こそ絶句して固まった。
そして焦燥に駆られる彼らの耳に聞こえてきたのは、彩昂祭実行委員長の校内放送だ。

『お待たせしました。ただいまより本年度の彩昂祭を開催します――！』

そのアナウンスが終わると同時に、生徒たちが廊下にあふれ出す。模擬店の営業が解禁され、展示の客引きも一気にヒートアップ。喧噪に包まれた校舎の中で、古城たちは放心したように立ち尽くしていた。

3

最初に冷静さを取り戻したのは浅葱だった。ハッとなにかを思いついたように顔を上げ、すがるような口調で深森に訊く。

「そう言えば解毒剤ってないんですか？　惚れ薬の」

「ないわよ。作れと言われれば、二、三時間で出来ると思うけどー」

「一時間でやれ！　今すぐ作れ！」

古城は、くわっ、と目を見開いて母親を怒鳴りつけた。

深森は拗ねた子どものように頬を膨らませ、

「えー……でも、貴重な人体実験の機会が……」

「やかましいっ！」

古城の剣幕に圧倒されたのか、深森は、仕方ないなあ、と肩を落とす。

「まあ、それなら、ここでちゃっちゃとやっちゃいますか」

そう言って、やる気なさげな足取りで歩き出す深森。彼女が向かった先は、高等部の校舎内にある生物準備室だった。

たまたま鍵が開いていたのをいいことに、彼女は無断でずかずかと教室の中に入っていく。

「高校の理科室で作れるのか……」

成り行きで深森についてきた矢瀬が、感心したように呟いた。深森は鼻歌混じりに薬品棚に近づくと、収納されていた試薬や薬草などを勝手に取り出していく。

「ふんふー……ちょうどいいものがあるじゃない」

「言われてみれば、妙に充実してるわね」

浅葱が、薬品棚を眺めて困惑の表情を浮かべた。いちおう〝魔族特区〟内の教育機関ということで、彩海学園の生物室は、一般的な高校に比べて贅沢な作りになっている。が、それにしても薬品棚の中身の潤沢ぶりは度が過ぎていた。深森が喜ぶほどの貴重な試料や、見るからに毒々しい薬草、魔術の材料などが無造作に陳列されている。

「――それらの薬草には、危険な成分が含まれていると警告。不用意に触らないことを推奨します」

そして戸惑う古城たちに背後から聞こえてきたのは、抑揚の乏しい人工的な少女の声だった。

準備室の奥の扉が開いて、藍色の髪の小柄な少女が顔を出す。ホウキとチリトリを持った、メイド服姿の人工生命体だ。

「アスタルテ？　そうか、これって那月ちゃんのコレクションか……」

人工生命体の少女の存在で、古城は、薬品棚が充実していた理由に気づく。国家攻魔官にして古城たちの担任教師でもある南宮那月が、この生物準備室の薬品棚を、自分用の保管

庫として私物化して使っていたらしい。

「肯定。現在は私が管理を任されていますと回答」

アスタルテが無表情なまま淡々とうなずいた。〝空隙の魔女〟と呼ばれる那月なら、貴重な魔術薬品や薬草を保有していても不思議ではない。そしてアスタルテは、そんな那月の保護観察対象として、助手のような仕事を押しつけられているのだった。

「あらあら。これはこれは……」

アスタルテと初めて遭遇した深森が、研究者としての興味を惹かれたように、人工生命体の少女に歩み寄る。んふー、と低くうなりつつ、ごく当然のような態度で、いきなりアスタルテの胸をわしづかみにする深森。

「なるほど、今ドキの学校には、こんな可愛いメイドが雇われてるのね。ふむ、これは意外に」

「いきなり初対面の人工生命体の胸を触るな！」

アスタルテの胸をもみしだく母親の後頭部を、古城が乱暴に張り飛ばす。アスタルテは感情のない瞳を深森に向けて、

「……こちらの女性は？」

「古城の御母堂様だよ。いちおう怪しい人じゃない」

渋面で沈黙する古城に代わって、説明したのは矢瀬だった。アスタルテは、自分の胸を触って恍惚の表情を浮かべる深森と、その隣の古城を静かに見比べて、

「状況把握」

「なぜそこで納得する……!?」

古城が傷ついたように唇を歪めてうめく。

「とにかく非常事態なの。那月ちゃんには、あたしたちがあとで説明するから、ここにある材料と道具を使わせて。お願い、アスタルテさん」

浅葱が拝むような姿勢で言う。古城も、母親の首根っこをつかんで神妙に頭を下げ、

「ついでにこいつが逃げ出さないように見張っといてくれ」

「――命令受諾」

アスタルテが表情を動かさずにそう言った。

「すまん、助かる」と古城が息を吐く。いまだ楽観はできないものの、これでいちおう解毒剤のアテは出来たことになる。

「さて、と……まあ、最悪の場合は深森さんの解毒剤に頼るとしても、できればその前に薬を回収しておきたいとこだな」

矢瀬が気を取り直すような口調で言った。浅葱が真面目な表情で考えこむ。

「製菓用のチョコを使う可能性があるとしたら、軽食系の模擬店よね。喫茶店とか、屋台とか」

「模擬店か……高等部の校舎と校庭だな……」

窓の外を眺めて古城が呟く。校庭には主に運動部の有志による屋台が軒を並べているし、教室で喫茶店などを営業しているクラスも多い。

「さっきメールで確認したんだけど、実行委員会の倉庫には、新品未開封の製菓用チョコが、まるっと段ボール一箱ぶん余ってるって」

浅葱が愛用のスマホを眺めながら報告する。マジか、と古城は顔をしかめて、

「じゃあ、今模擬店で使われてるチョコは……」
「深森さんの惚れ薬と入れ替わってる……ってことよね」
「……最悪だな」矢瀬がうんざりと首を振った。「時間がねえ。手分けして回収しよう。俺は高等部の校舎に戻るから、校庭の屋台は任せていいか、古城？」
「部活系の模擬店か。わかった」
「そういうことなら、あたしはこっちの特別教室を回るわね。文化部の部室でも、何軒か模擬店をやってたと思うから」
「ああ、頼む。じゃあ、行くか」
どんよりした表情を浮かべて、生物準備室を出て行く古城たち。
「頑張ってねー」
緊張感のない態度でにこやかに手を振る深森に見送られ、三人はもう一度ぐったりと溜息をついた。

4

古城たちと別れた矢瀬は、ひと気のない廊下の隅に隠れて、首に引っかけてあった密閉型のヘッドフォンを耳に当てた。
「こう雑音が多いと、こいつを使うのはつらいんだけどな……」
溜息交じりに呟いて目を閉じ、自分の能力を発動する。
矢瀬は過適応能力者――いわゆる〝天然モノ〟の超能力者だった。主な能力は大気振動の解析と制御。念動力による仮想的な集音器を、あらかじめ設置しておくことで、範囲内のあらゆる音を正確に聞き分ける。
監視や追跡以外には、あまり役に立たない能力だが、今の状況では、おそらくそれなりに有効だろう。校舎内を飛び交う会話の断片をつなぎ合わせて、チョコレートを使っている模擬店を捜すのだ。
「……チョコレートブラウニーだと……!?」
そして矢瀬の超感覚が最初にとらえたのは、模擬店でケーキセットを注文する客の声だった。やや舌足らずでありながら尊大な、独特の口調。聞き覚えのある声だ。
「やばい……三年の教室か……！」
矢瀬はヘッドフォンを外して走り出した。行き先は校舎の四階にある高等部三年生の教室だ。
大正時代風の小洒落た装飾を施した正統派カフェ。袴姿の古風な給仕に囲まれて、『巡回中』の腕章をつけた小柄な女教師が、悠然と紅茶をすすっている。
「ストップ！　待った、那月ちゃん！　喰っちゃダメだ！」
カフェの中に飛びこんだ矢瀬は、今まさにブラウニーを食べようとしていた那月の手から、乱暴に皿を引ったくった。フォークを握り締めたままの那月は、不機嫌そうに眉を寄せ、矢瀬を睨みつけてくる。
「……なんのつもりだ、矢瀬基樹」
「ま、待った……これには深い事情があって」
「ほう？　いいだろう。言ってみろ」
那月が、むしろ穏やかな表情で矢瀬を見る。優雅なティータイムを邪魔されたことで、相当気が立っているらしい。矢瀬は焦りで表情を引き攣らせながら、

「実はこのブラウニーには、ヤバい薬物が混入されてるんスよ。喰ったら取り返しのつかないことになるから止めなきゃと思って。いやマジで」
「薬物……だと？」
那月が小さく眉を上げた。矢瀬の言葉を聞いていたほかの客たちが、一斉にざわざわと騒ぎ出す。なにしろこの喫茶店は、女子高生の手作りケーキ、が売りなのだ。そのケーキに危険な薬物が混入しているといわれて、落ち着いていられるはずがない。
「どうしてそんなことを言うのかしら、矢瀬くん？」
そのとき静かな口調で矢瀬に呼びかけてきたのは、袴姿の女子生徒だった。なぜ三年生が俺の名前を知っているのだろう、と矢瀬は戸惑いながら振り返り、そして、ぎくり、と硬直する。
「ぺ、ペーパーノイ……じゃなくて、えーと、緋稲先輩!?」
「……」
感情を圧し殺したような眼差しで矢瀬を睨んでいたのは、三つ編みに眼鏡の小柄な女子生徒。いつも持ち歩いている分厚い文学書の代わりに、今日の彼女が携えているのは、ケーキの作り方を解説した料理本だ。
「も、もしかして、このブラウニーを作ったのは……」
「ええ、私」
どこか悲しい口調で三つ編みの少女が言う。矢瀬の顔面から血の気が引いた。
この目立たない女子生徒の正体は、獅子王機関〝三聖〟の一人。〝静寂破り〟の異名を持つ日本最強クラスの攻魔師なのだ。
「いや……違っ、違うんだ、先輩！　薬物混入というのは本当の話で、MARから流出した魔術薬品が製菓用チョコと入れ替わってたんだって！　本物のチョコは彩昂祭実行委員会の本部にあるから、その……」
「つまりこれは人工島管理公社の、獅子王機関に対する嫌がらせと考えていいのですね？」
冷え冷えとした彼女の問いかけに、矢瀬は世にも情けない表情を浮かべて首を振った。
「なんでそうなるっ……!?　違うんだっ！　古城が……古城のやつがまた妙な事件に巻きこまれてっ！」
「わかりました。その話はまたあとで」
一方的にそう言い残して、三つ編みの少女が去って行く。矢瀬はそれを為すすべもなく見送った。さすがにそれを不憫に思ったのか、那月がめずらしく気遣うような言葉をかけてくる。
「……いいのか、矢瀬基樹。あの女、たしか貴様の――」
「はっ……はは、大丈夫っすよ。俺と先輩はラブラブだから」
掠れた声でそう言って、矢瀬は虚ろな笑みを浮かべた。
「とてもそうは見えなかったがな」
やれやれと息を吐きながら、那月が静かに紅茶をすする。

5

校庭に設けられた特設ステージの隣に、模擬店がずらりと並んでいた。彩昂祭の名物にもなっている屋台村だ。彩海学

園では伝統的に、運動部がそれぞれ食べ物の屋台を出すことになっている。その中でもひときわ目立っていたのが、チアリーディング部のクレープ屋台だった。

「はい！　アーモンドチョコクレープとストロベリーチョコクレープお待ち！　トッピングのアイスはサービスね」

屋台の中でクレープを焼いていたのは、エプロン姿の暁凪沙だ。

それを受け取ったのは、ギターケースを背負った小柄な少女と、銀髪碧眼のおっとりとした雰囲気の女子生徒。姫柊雪菜と叶瀬夏音である。それぞれクラスの出し物の合間を縫って、凪沙の屋台に遊びに来たのだ。

「ありがとう、凪沙ちゃん」

「美味しそうでした」

雪菜と夏音は、手渡されたクレープを、ものめずらしそうな表情で眺めている。どうやら二人がクレープの実物を見たのは、今回が生まれて初めてのことらしい。

「いやいや、二人が来てくれて嬉しいよ。さっきからチア部の先輩たち目当ての冷やかしばっかで、ちょっと寂しかったんだよね」

クレープの生地を混ぜながら、凪沙が拗ねたように唇を尖らせる。

一見、繁盛しているように見えるチアリーディング部の屋台だが、客のほとんどは特設ステージで行われているチアダンスが目当ての男子である。集客効果は抜群だが、まだ午前中ということもあってか、今イチ屋台の売り上げに結びついていない。実質的に雪菜と夏音が、クレープ屋台の最初の客ということになる。

「ほらほら、アイスが溶けないうちに食べて食べて！」

「うん」

「いただきます」

凪沙に勧められるまま、雪菜と夏音がクレープにかじりつこうとする。それをギリギリで止めたのは、息を切らせて駆けつけてきた古城だった。

「待ったっ！　喰うな、姫柊！　叶瀬も！」

古城は咄嗟に夏音の口元を手で押さえ、雪菜の手からクレープを奪い取る。突然乱入してきた古城の狼藉に、夏音と雪菜は唖然と目を瞬いて、

「お兄さん……？」

「せ、先輩!?」

「ちょっ、なにやってるの古城君!?　クレープが食べたかったらちゃんと並んでよ！」

眉を吊り上げて憤慨した凪沙が、握っていたパレットナイフの先端を古城に向けた。

雪菜は呆れ顔で小さく溜息をついて、

「そんなにお腹が空いてたんですか、先輩……もう。だったら半分こしてもいいですよ」

「違う！　このクレープに入ってるチョコっぽいやつは、チョコじゃなくて惚れ薬なんだよ！　ＭＡＲの研究所で開発してたやつ！」

古城が早口で言い訳する。あまり事情を大っぴらにしたくはなかったのだが、彼女たちが相手なら、真実を伝えても問題ないと思ったのだ。

「ほ……惚れ薬？」

「深森ちゃんのとこで作ってたの？」

雪菜と凪沙が、半信半疑の表情を古城に向けてきた。話があまりにも突飛すぎて、どう反応したらいいかわからない、という雰囲気だ。

「ハッキングかなんかの影響で、間違って出荷されちまったらしい。本物のチョコは実行委員会の本部にあるらしいから、そっちに取りに行ってくれ」

妙にリアリティのある古城の説明が効いたのか、凪沙もようやく納得したようにうなずいて、

「そ、そうなんだ……よかったよ、まだお客さんに出す前で」

「もしこれをわたしたちが食べていたら、どうなってしまっていたんでしょうか？」

雪菜がさすがに不安そうな表情で訊いてくる。古城は苦々しげに溜息をついて、

「古典的な惚れ薬を、現代的な技術で再現したって言ってたからな。普通に最初に見た相手のことを好きになるんじゃないか？　健康には特に影響ないらしいが……」

「惚れ薬の効果時間は？」

「実験段階の試作品だから、作った本人たちにもよくわかってないらしい。だけど、効き目が強力すぎて売り物にならなかったって話だからなー……」

「まずい……ですよね」

「ああ、まずいな」

雪菜と顔を見合わせて、古城は頭痛をこらえるように額に手を当てた。

「そんな危険物が出回ってるのに、内緒にしてていいの？　校内放送とかで警戒を呼びかけたほうがよくない？」

凪沙が、未使用の惚れ薬入りチョコをゴミ箱に放りこみながら訊いてくる。

古城は重々しく首を振り、

「下手に公表したらパニックになるだろ。だからこうしてこっそり回収してるんだよ」

「ああ、そっか。なるほどね」

「びっくりでした。それでこんな不思議な味がしたんですね」

「ああ、たぶん……って、え？　味？」

夏音の何気ない感想に、古城たちがぎょっとして振り返る。

「カ、夏音ちゃん、なんで食べてるの!?」

凪沙が声を裏返らせて訊いた。夏音は、惚れ薬入りのクレープを綺麗に食べ終えたところだった。古城の説明を聞いていなかったわけではないはずだが、

「食べ物を粗末にしてはいけないと教わりました。凪沙ちゃんが私に作ってくれたものだし」

「あ、ありがと……って、いや、それはそうだけど、時と場合によるっていうか……」

夏音本人が平然としているせいで、古城たちは余計に狼狽する。

「だ、大丈夫なのか、叶瀬？　なにか変わったことはないか？

気分が悪いとか、目眩がするとか？」
「と、とりあえず保健室……いえ、病院……特区警備隊に連絡を！」
「あ、あの、今のところ平気でした、けど……あ！」
慌てふためく古城と雪菜に、穏やかに微笑みかけていた夏音が、ふとなにかに気づいたように自分の足元に視線を落とした。彼女の足首にじゃれついていたのは、生後間もない小さな猫だ。場違いな子猫の唐突な出現に、古城は軽く面喰らって、
「野良猫？　こんなところにか？」
「最近、校内によく迷いこんでくるんです。そのたびに叶瀬さんが安全な場所まで連れて行くんですけど」
雪菜も戸惑ったように答えてくる。その間に夏音は子猫をそっと抱き上げて、
「どうしましょう、お兄さん。この子を見ていると、なんだか胸がドキドキして、苦しくなってしまいました」
「お、おう……」
幸せそうに微笑む夏音に、どう返事をすればいいかわからず、古城はただ曖昧にうなずいた。
「惚れ薬の効果が発動してるんでしょうか？」
「なんだか、やってることは普段とあんまり変わらないような気がするね」
雪菜と凪沙が顔を寄せ合い、声を潜めて今後の対応を協議する。
「……とりあえず放っておいても大丈夫か」
古城は、どことなく投げやりな気分になって呟いた。
夏音は子猫を胸に抱き、幸せそうにじゃれ合っている。ひどく平和な光景だった。

6

「チョコワッフルとチョコドーナツは回収済み。タコ焼きと焼きそばとフランクフルトソーセージは問題なし。あとは揚げ餅とかき氷か……ここもチョコレートは関係なさそうだな」
新聞部が配っていた彩昂祭のガイドブックを参照しながら、矢瀬は高等部の校舎を忙しなく駆けずり回っていた。問題の惚れ薬は、すでにいくつか回収済みだ。
幸いにして今のところは生徒の犠牲者は出ていない。不幸な誤解によって〝静寂破り〟に嫌われた矢瀬本人を別にすれば、だが。
「あとは一年A組が、カフェをやるって言ってたな……」
そう呟きながら矢瀬が向かったのは、校庭に面した校舎一階の教室だった。
校庭側の扉を開放して、屋外のテラスにはパラソルつきのテーブルを並べている。教室の立地条件を生かしたオープンカフェだ。店員の衣装は、欧州のカフェをイメージしたギャルソン風で、生徒や保護者の評判も上々のようだ。
「げっ、あいつら……！」
混み合う店内に見覚えのある少女たちの姿を見つけて、矢瀬が表情を凍らせる。

遠目からでも、異様に目立つ二人組だった。一人は銀髪碧眼の外国人。もう一人は、栗色の髪をポニーテールにまとめた長身の少女だ。北欧アルディギア王国の王女ラ・フォリア・リハヴァインと、その護衛役の煌坂紗矢華である。どうやら彩昂祭の見学のために、またしてもこっそり公式行事を抜け出してきたらしい。
「ストップ！　そこまでだ、二人とも！」
王女たちが座るテーブルには、上品に盛りつけたクッキーの皿が置かれている。それもチョコチップクッキーだ。洗練された仕草でクッキーを口に運ぼうとしたラ・フォリアを、矢瀬がギリギリで制止する。
「あら……あなたは、たしか人工島管理公社の――」
「や、矢瀬基樹!?」
矢瀬を見上げて優雅に微笑む王女と、抱えていた楽器ケースから咄嗟に剣を抜こうとする紗矢華。矢瀬は引き攣った笑みを浮かべながら、額に浮かぶ汗を拭って、
「よ、よう、久しぶり。王女様もご機嫌麗しく……」
「よう、じゃないわよ！　あなた、今度はなにを企んでるわけ!?　この御方が誰かわかってるんでしょうね!?」
隣にいるラ・フォリアを指さして、紗矢華が大声で怒鳴り散らした。
その言葉を聞きつけた周囲の生徒たちが、ざわざわと一斉に騒ぎ出す。高校の学園祭ごときには不似合いな銀髪美少女の正体には、誰もが興味津々だったのだ。
「……誰だ？」
「あの銀髪の美人、矢瀬の知り合いか？」
「アルディギアの王女様に似てね？　ほら、国際会議で日本に来てるって……」
「あ……」
周りの群衆の反応を見て、紗矢華がさっと青ざめた。なにしろラ・フォリアは世界中に熱狂的なファンを持つ正真正銘のプリンセスなのだ。その有名人が学園祭に来ていると知られたら、押し寄せてくる野次馬で大混乱に陥りかねない。
「あのー、ちょっと、すみません」
紗矢華が焦りで思考停止している間に、男子生徒の一人がスマホ片手にラ・フォリアに声をかけてくる。スマホの画面に表示されていたのは、日本人のファンが描いた、ラ・フォリアの萌えキャラ風イラストだった。彼はそれをスマホの壁紙に設定していたのだ。
「お姉さん、もしかして、この人と同一人物？　ていうか、本人？」
「な……っ!?」
あまりにも無礼な一般人の物言いに、紗矢華の表情が凍りつく。下手したら外交問題にもなりかねない不祥事だ。しかし、ラ・フォリアはむしろ愉快そうに微笑んで、
「ふふっ、コスプレというものです。似てますか？」
「ああ……そうか！　それでそんなそっくりなんだ。なるほどねー……」
男子生徒は満足そうにうなずいて、ラ・フォリアに手を振りながら去って行く。

そんな彼の無頓着な態度に、紗矢華は毒気を抜かれて、
「あ、それで納得するんだ……」
「ええ、日本の文化を学んでおいた甲斐がありました」
「誰が教えたんだ、その無駄な知識……」
得意げに胸を張るラ・フォリアを眺めて、矢瀬は呆れたように首を振る。
そしてラ・フォリアは微笑みを絶やさぬまま、すべてを見透かすような視線を矢瀬に向けた。
「それよりも、あなた、矢瀬基樹でしたか。なにをそれほど慌てていたのです？　まるでこのチョコチップクッキーに、手違いで惚れ薬が混入していたかのような慌てぶりでしたが？」
「あ、いや……全部そのとおりなんですけど……」
鋭すぎだろ、と矢瀬は言葉をなくした。さすがは切れ者で知られたアルディギアの腹黒王女である。あのディミトリエ・ヴァトラーですら、彼女に一目置いている理由がよくわかる。
「え、惚れ薬って、本当に……？」
紗矢華が、目を大きくして矢瀬を見た。矢瀬は小さく首肯して、
「俺にも詳しい事情はわからないんだが、ＭＡＲの研究所で開発されてた試作品らしい」
「ＭＡＲって……たしか暁古城のお母さまが働いてる会社よね？」
そう言って、真顔でなにやら考えこむ紗矢華。ラ・フォリアが、そんな紗矢華を見つめて、クス、と小さく失笑した。
「ふふっ。なにかよからぬことを考えているようですね、紗矢華」
「へ!?　ち、違います！　あ、暁古城に惚れ薬を飲ませようなんて、そんなことは全然……！」
紗矢華は物凄い勢いで赤面しながら、ぶるんぶるんと激しく首を振る。その直後、焦りまくる紗矢華に追い打ちをかけるように、背後から雪菜の声がした。
「紗矢華さん！　無事ですか!?」
「ひっ!?　ち、違うの、雪菜！　ほんの一瞬、魔が差しただけで、本気で暁古城のことなんかを考えていたわけじゃ――」
懺悔するようにその場にひざまづき、紗矢華が雪菜に赦しを請う。
「煌坂？　なに慌ててんだ、おまえ？」
そんな紗矢華を見下ろして、怪訝な表情を浮かべていたのは古城だった。そのことに気づいた紗矢華は、あうあう、と舌をもつれさせながら古城の胸ぐらをつかみ上げ、
「あ、暁古城っ……！　元はと言えば、あなたのせいで……！」
「うおっ!?　だからなんなんだよ、おまえは――!?」
なぜか怒りの矛先を向けられた古城は、涙目になっている紗矢華を見て途方に暮れる。
「古城、そっちはどうだ？」
矢瀬が疲れた声で古城に訊いた。紗矢華を不器用にあしらいながら、古城も真面目な顔つきになって、
「校庭のほうは大丈夫だと思う。姫柊にも手伝ってもらって、屋台は一通りチェックしたから」

「高等部の校舎も、ここで最後だ。あとは浅葱が、文化部の模擬店のぶんを回収してくれれば、どうにか一件落着だな」
矢瀬の報告を聞いた古城が、そうか、と薄く安堵の溜息をつく。今のところ特別教室校舎の方角で、騒ぎが起きている気配はない。浅葱のほうも上手くやってくれているらしい。
「話は聞きました。大変でしたね、古城」
ちょんちょん、とラ・フォリアに肩を叩かれて、古城は決まり悪そうな表情で振り返る。
「ラ・フォリアか……悪いな、騒ぎに巻きこんじまって」
「いえ、わたくしは気にしていませんから。それよりも飲み物はいかがですか？」
「ああ、サンキュ。いただくよ」
王女に差し出された紙コップを、古城は警戒することなく受け取った。実際に喉が渇いていたこともあって、勢いよく口の中に流しこむ。
適度なほろ苦さと甘ったるさが、疲れた身体に心地好かった。
「美味い……っていうか甘いな。なんだ、これ？」
「ふふっ。ホットチョコレートです」
ラ・フォリアは古城を見つめたまま、好奇心に満ちた微笑を浮かべている。
「……は？」
王女がさらりと口にした言葉に、その場の全員が石化したように動きを止めた。
「日本では、ココアと呼ぶのでしたね。欧州では、チョコレートといえば、かつてはこちらの飲み物のほうを指す言葉だったのです。もちろん今でも人気がありますよ」
「い、いや……だから、なんで……」
「な……な、なにやってるんですか!?　王女おぉっ！」
ようやく状況を把握した紗矢華が、取り乱しながら王女を咎めた。
しかしラ・フォリアは悪びれた様子もなく、ちょこんと可愛らしく首を傾げて、
「チョコチップクッキーに惚れ薬が入っているということは、こちらのホットチョコレートも危険ではないかと予想してみたのですが」
「だ、だからって暁古城で試さないでください！」
「心配は無用です、紗矢華。ちゃんとわたくしが責任を取りますから」
「ま、まさか最初からそれが狙いで……！」
ラ・フォリアは、ふふっと微笑んで紗矢華の質問を受け流す。
一方、ホットチョコレートを飲んだ古城は、脂汗を流しつつ、しばらく立ち尽くしていたが、
「こ、古城君……大丈夫？」
「ああ、べつになんともないぞ」
特に体調に変化がないことを確認して、心配する妹を励ますように古城は笑ってみせた。
「こちらのチョコレートには、薬が入ってなかったんでしょうか？」
空になった紙コップを見下ろして、雪菜が疑問を口にする。
「かもな。もしくは俺の体質には効かないとか」

吸血鬼だからな、とは言わなかったが、もちろん雪菜には古城の意図が伝わったはずだった。よかった、と唇の動きだけで雪菜が呟くのが見える。

そして雪菜は、照れ隠しのように怒ったような表情を浮かべ、

「先輩、唇にチョコがついてますよ。ほら……動かないでください」

取り出したティッシュで、古城の口元を拭おうとする雪菜。しかし彼女と目が合った瞬間、古城がうっ、と低くうめきを洩らす。

「せ、先輩？　どうしたんですか？」

「わからない……だけど、姫柊がなんか、急にすごく可愛く思えて……」

「へ!?」

古城の瞳に正面からのぞきこまれて、雪菜は硬直しながら頬を染めた。ぽかんと目を丸くして、二人のやりとりを眺める矢瀬と凪沙。

「なるほど……効果の発動までにタイムラグがあったのですね。誤算でした……」

ラ・フォリアが頬に手を当てて、一人で冷静にうなずいている。そんなラ・フォリアの肩を揺すって、紗矢華が情けない悲鳴を上げた。

「お、王女ぉぉぉ――っ！」

7

「つ、疲れた……これで部活関係の模擬店は全部かな……」

回収を終えた惚れ薬の箱を抱えて、浅葱は廊下を歩いていた。

茶道部のお茶菓子や、家庭科部の手作りケーキ、漫研の漫画喫茶や、合唱部の歌声喫茶や、ジャズ研のジャズ喫茶や、パソコン同好会のネットカフェなど、チョコレートを使っている部活は案外多くて苦労した。ていうか喫茶店多すぎだろ、と浅葱は思う。

しかし苦労の甲斐あって、どうにか致命的な事態は回避することができたらしい。

「……これだけ大変な思いをしたんだから、一欠片くらいもらってもバチは当たらないわよね」

ぼそり、と本音を洩らしながら、思わず惚れ薬に手を伸ばしそうになる浅葱。しかし、すぐに思いとどまって、馬鹿馬鹿しいと肩をすくめた。惚れ薬なんかに頼るのは、敗北を認めるようで癪だった。そんなものは浅葱のプライドが許さない。

「それもこれも古城の馬鹿が悪いのよ。あのヘタレ、おかげであたしがこんな苦労を――」

理不尽な怒りに打ち震えながら、浅葱が大股で校舎の外に向かう。と、突然、思いがけない方角から誰かに声をかけられた。

「あれ？　どうしたの、藍羽ちゃん？　ずいぶん疲れた顔したりしてるけど？」

「あ……笹崎先生……」

調理実習室から大鍋を抱えて出てきたのは、体育教師の笹崎岬だった。今日はいつものチャイナドレス風の私服ではなく、一流シェフを思わせる白いコック服を着ている。

「こ、こんにちは。先生は模擬店のお手伝いですか？」

「うん。武術研究会で屋台出してるから。よかったら藍羽ちゃんも、カレー食べてかない？」

「……カレー、か。さすがにチョコとは無関係よね」

「ん？」

真顔で大鍋をのぞきこむ浅葱を見て、岬が怪訝な顔をする。浅葱は慌てて首を振り、

「いえいえ、なんでもないんです。今はちょっと急いでいるので、あとで必ず行きますね」

「オッケー。待ってるね」

岬は巨大な鍋を軽々と抱えて、人混みの中にまぎれていった。

そして浅葱は、ふと校庭脇のオープンカフェに目を留める。そこでは見覚えのある集団が、なにやら激しく揉めているところだった。

「あいつら、なにやってるのよ……」

ああもう、と憤激した浅葱が、惚れ薬の箱を抱いたまま走り出す。

騒ぎの中心にいるのは、浅葱のよく知っている人々だ。古城と矢瀬と暁凪沙、中等部の転校生の姫柊雪菜。煌坂紗矢華に、アルディギア王国の王女までいる。

「ちょっと、基樹。あんたたち、なにサボってるわけ!?」

野次馬たちの群れに割りこんで、浅葱が矢瀬を問い詰める。

「あ、浅葱!?　なんでこんなときに……!?」

弾かれたように振り返った矢瀬は、なぜか怯えたような表情を浮かべて両腕を広げた。まるで古城の姿を隠そうとするような行動だ。そんな矢瀬に、浅葱は本能的な疑念を覚える。そして浅葱の視界に飛びこんできたのは、人目もはばからずに密着している古城と雪菜の姿だった。

「せ、先輩。こんなところでは駄目です。ひ、人が見てますから……」

「そうか？　俺には姫柊のことしか見えないぜ」

雪菜の手首をつかんだまま、歯の浮くようなセリフを口にする古城。雪菜は形ばかりの抵抗をしているが、なんだかんだで満更でもなさそうだ。

浅葱はぽかんと目を丸くして、

「な、なによこれ!?」

「いや実は、古城のやつが例の惚れ薬を……な」

「飲んだの!?」

矢瀬の首を締め上げながら、浅葱が乱暴に詰問する。

「まあ、飲んだっていうか、飲まされたっていうか……」

「なんとかしなさいよ、矢瀬基樹！　あなた暁古城の友達なんでしょ!?」

浅葱に加勢するような形で、紗矢華も矢瀬に詰め寄った。

しかし雪菜は、そんな紗矢華をなだめるように控え目な口調で、

「いえ、あの……わたしはべつに、このままでも……とりあ

えず害はないですし」
「「駄目ッ！」」
浅葱と紗矢華が同時に叫ぶ。
「解毒剤、解毒剤はどうなってるのよ、基樹！」
「あ、ああ……そういや、そろそろ完成してもいいころだよな……」
浅葱に言われて、矢瀬が時計を確かめる。そうやって浅葱たちが古城から目を離した瞬間、
「あーん」
雪菜を口説いていた古城の口の中に、ラ・フォリアがなにかを放りこんだ。それが惚れ薬入りのチョコチップクッキーだと気づいて、今度は雪菜が動揺する。
「ラ・フォリア!?　あなたは、また……！」
「ちょっと、古城!?　あんた、大丈夫なの!?」
浅葱が古城を心配して駆け寄った。そんな浅葱を、古城はなぜか驚いたように見返して、
「浅葱……」
「え？」
「わ、悪い。おまえの顔を見てたら、ちょっと照れるっていうか、なんだこれ……」
緊張で目を逸らす古城を見上げて、浅葱も胸の高鳴りを覚える。まるで出会ったばかりのような古城の初々しい反応が新鮮だ。
「どうやら薬による効果は上書きが効くようですね」
古城の変化を興味深く観察しながら、ラ・フォリアが冷静に呟いた。
「あー……浅葱。それで解毒剤はどうするんだ？」
気怠そうに頭をかく矢瀬に訊かれて、浅葱はぎこちなく首を振る。
「ああ、うん。そんなに急がなくてもいいかなって。ほら、人間、焦ってもいいことないし」
「だ、駄目ですっ！　こんな状態の暁先輩を野放しにしておくわけには――」
古城を横取りされる形になった雪菜が、浅葱に真っ向から反対する。
その隙に紗矢華は、テーブルの上に残っていたチョコチップクッキーをつまみ上げ、
「し、仕方ないわね。みんな、ここは私に任せて」
「なにをやってるんですか、紗矢華さんまで！」
古城に無理やりクッキーを食べさせようとする紗矢華を、雪菜が慌てて押し留める。
凪沙はどこか呆然とした様子で、実の兄が招いた混乱を眺めていたが、
「あれえ……なんの騒ぎだろ」
校庭の中央付近で新たな騒動が起きていることに気づいて、背伸びしながらそう言った。
「え？」
浅葱たちも異変を察知して振り返る。
古城の暴走のせいで気づくのが遅れたが、かなり大規模な揉め事だ。悲鳴を上げて逃げ回っている女子生徒や、殴り合

いを始めている男子もいる。
校庭にいた生徒たちの多くが関わり合いになるのを恐れて避難を始め、そのせいで余計にパニックが広がりつつあった。
「あ、お倫！　ねえ、ちょっと……なにかあったの!?」
避難してきた人々の中に知り合いを見つけて、浅葱が慌てて呼び止めた。浅葱たちの姿を認めた築島倫が、少しホッとしたように近づいてきて、
「私にもよくわからないんだけどね。噂じゃ、カレーを食べた生徒たちが、ちょっとおかしくなったみたいで。他人の彼女を奪おうとしたとか、いきなり知らない子を口説き始めたとか」
「カ、カレー……?」
浅葱の額を汗が流れた。大鍋を運んでいた笹崎岬の姿が脳裏に甦る。武術研究会のカレーは惚れ薬と無関係だと思って、特にチェックしなかったのだが――
「おい、浅葱、惚れ薬の回収は終わったんじゃなかったのか?」
「う、うん。だって問題になってるのはカレーでしょ……!?　どうしてチョコと関係あるのよ。いくらなんでもカレーにチョコは――」
不安そうな表情を浮かべる矢瀬に、浅葱が必死に釈明する。
それを隣で聞いていた凪沙が、怖ず怖ずと言いにくそうに口を開いて、
「入れるよ、カレーにチョコ」
「え?」
「隠し味で、ちょっとだけね。コクが出て美味しくなるんだよ。あたしも最近、笹崎先生に教えてもらったんだけど」
「さ、笹崎先生に……?」
浅葱の表情に焦りが浮いた。しかし今さら原因がわかったところで手遅れだ。もはや犠牲者は古城一人ではない。これ以上、被害が広がることだけは、なんとしても阻止しなければ――
「基樹！　解毒剤を取ってきて！　早く！」
「お、おう！」
浅葱の言葉に背中を押されて、矢瀬は生物準備室に向かおうとする。だが、なぜか、その前に立ちはだかったのは古城だった。
驚く矢瀬の肩を力強く抱き寄せて、古城が耳元で甘く囁いてくる。
「おいおい、恋人の俺を置いてどこに行くんだ、親友？　つれないじゃないか」
「こ……古城!?　ちょっ……どうなってんだ、おい!?」
全身に悪寒を覚えながら、矢瀬が状況の説明を求めた。
「困りましたね。紗矢華がチョコを食べさせすぎて、わけがわからなくなったみたいです」
「ち、違っ……だって、王女が何度も上書きしようとするから……!」
空になったクッキーの皿を見下ろしたまま、ラ・フォリアが素知らぬ顔で呟き、紗矢華が頼りなく言い訳する。
「マジか、おい……!」
いつになく積極的な古城の腕を強引に振りほどきながら、矢瀬は逃げるように駆け出した。

8

「はあっ……はあっ！　どうにか撒いたか……!?」
廊下の角を曲がったところで、矢瀬は乱れた呼吸を整えながら背後を振り返った。矢瀬を執拗に追ってきた古城を、どうにか人混みにまぎれて振り切ったところだ。
「やべえな……さすがMAR製の惚れ薬だぜ。まさか吸血鬼の真祖にも効果があるとはな」
古城に迫られた忌まわしい記憶を振り払うように、矢瀬は激しく頭を振る。
真祖クラスの吸血鬼ともなれば、あらゆる魔術に対して強い耐性を持つことで知られていた。深森が作った惚れ薬は、そんな真祖の力を手に入れた古城を、あっさり支配してしまったのだ。
使いようによっては世界のパワーバランスを崩壊させかねない、おそろしく危険な薬品だった。おそらく生半可な方法では、あの強力な惚れ薬を無効化するのは不可能だろう。時間が経てば効果が切れるのかどうかも怪しいものだ。
「やっぱ深森さんの解毒剤が完成してることに賭けるしかないか……」
祈るような気分で呟きながら、矢瀬は生物準備室に向かって走り出す。と、そんな矢瀬の視界の隅に、意外な人物の姿が映った。
「……ディミトリエ・ヴァトラー!?」
白い三つ揃いのスーツを着た青年が、校内の廊下を歩いている。平凡な公立学校の廊下には不似合いな、金髪碧眼の美男子だ。
彼の手の中に握られているのは、模擬店で販売していたチョコバナナだった。彩昂祭のガイドブックには載っていなかった商品である。
「バナナに、チョコレートのコーティングとトッピングを施した食べ物ですか。チョコレートフォンデュの応用ですね」
ヴァトラーに付き従っていた若者が、穏やかな声でそう言った。まるで少女のように繊細な美貌の若い貴族――キラ・レーベデフ。戦王領域から派遣されてきた吸血鬼の一人である。
「そのような下賤な人間どもの菓子を食さずともよろしいのでは、閣下?」
咎めるような口調で言ったのは、もう一人の吸血鬼――トビアス・ジャガンだった。
しかし金髪の青年貴族は、愉快そうに笑って首を振った。
「いや、なかなか煽情的なデザートじゃないか。この形、気に入ったヨ」
獰猛な蛇のように舌を伸ばして、ヴァトラーはチョコバナナの先端をねっとりとねぶる。さらに彼は唇の端を吊り上げて華やかに微笑み、
「それに、気づかないか？　このスクールフェスティバルの会場、妙な気配が漂っているね」
「……それはここが第四真祖の本拠地だからではないのですか?」
「違うね。これはもっと古くて邪悪なものサ。つい最近、これによく似た感覚を味わったヨ」

そう告げるヴァトラーの瞳には、強敵との遭遇を歓迎するような、好戦的な笑みが浮かんでいた。
「……なんであの男が彩海学園に!?」
廊下の柱の陰に隠れて、矢瀬が声を震わせる。
いくら部外者の立ち入りが許可されている学園祭期間とはいえ、戦王領域の貴族が訪れるという事態はさすがに想定外だった。それでなくてもディミトリエ・ヴァトラーといえば、戦闘狂として世界的に知られた危険人物なのである。
「ふむ……そこの少年。出てきたまえ」
そんな矢瀬の警戒心を敏感に感じ取ったのか、ヴァトラーが不意に鋭く呼びかけてくる。
逆らっても無駄だと判断して、矢瀬は大人しく姿を現した。
「おや……キミは、たしか気流使いの……」
ヴァトラーがかすかに眉を上げた。矢瀬はいくつかの事件現場で、ヴァトラーと遭遇したことがある。とはいえ、もちろん学校の中で、生徒として彼に会うのは初めてだ。
「アルデアル公……あんたまさか、そのチョコバナナ、喰ったのか?」
緊張の面持ちで矢瀬は訊いた。ヴァトラーが握っていたチョコバナナの先端には、くっきりと彼の歯形が残されている。
「ああ、これか。プリミティブな菓子だけど、なかなか美味だったよ。栄養価も高そうだ。軍用の戦闘糧食に組みこんでもいいかもしれないな……」
朗らかに微笑んでそう言いかけたヴァトラーが、突然、軽い目眩に襲われたようにふらついた。それを見た矢瀬の頬が、恐怖に歪む。
「ま、まずい……最悪だ」
「最悪だと? 貴様、閣下に向かって……」
矢瀬の呟きを聞きつけたジャガンが、敵意を露わに近づいてくる。そのジャガンを止めたのはヴァトラーだった。
「よせ、トビアス」
「し、しかし閣下……!?」
「彼はボクの愛しい獲物だよ。手を出さないでもらおうか」
そう言ってヴァトラーが美しく笑う。彼の予想外の言葉にジャガンたちが固まり、矢瀬は身も凍るような恐怖を覚えた。
「さあ、少年。さっそく愛を語らおうじゃないか。血まみれで美しく抗う様を見せておくれ」
「ちょ……もしかしてあんたの愛情表現って……!」
ヴァトラーの歪んだ愛情が、矢瀬を絶望のどん底へと突き落とす。この美しい青年貴族が愛するのは、唯一、強敵との死闘のみ。戦いこそが彼の最上級の愛情表現なのだ。
「待て! そこまでだ、ヴァトラー!」
死の予感に震える矢瀬を救ったのは、廊下の窓ガラスを蹴破って乱入してきた古城だった。
「こ、古城!?」
「悪いが矢瀬には手を出させねえ。そいつは俺の親友だからな」
古城はそう宣言して、矢瀬の肩を力強く抱き寄せる。しかし歪んだ愛情に支配されたヴァトラーに対して、その行為は火に油を注ぐようなものだった。
瞳を真紅に染めながら、ヴァトラーが荒々しく牙を剥く。

「ふふっ、嬉しいね、古城。もちろんボクは三人一緒でも構わないヨ。さあ、ここでお互いの愛の深さを確かめ合おう」
「ふざけろ!」
怒鳴り返す古城の全身からも、濃密な魔力が噴き上がる。
第四真祖である古城と、その真祖にもっとも近い力を持つといわれるヴァトラー——彼ら二人が激突すれば、被害はおそらく彩海学園の中だけでは済むまい。最悪、絃神島そのものが破壊されて海に沈む可能性も高かった。
「ば、馬鹿、おまえら、こんなところで眷獣を使う気か!?あんたたちも止めてくれ!」
矢瀬はなりふり構わず、ジャガンたちに泣きついた。古城たちの激突を止められる可能性がわずかでもあるとすれば、それは彼らだけだからだ。
「あ、ああ……そうか、いやしかし……」
とはいえ戦王領域の貴族たちも、あまりにも突然の展開に対応出来ずにいるらしい。狼狽する彼らに頼るのを諦めて、矢瀬は再び生物準備室に向かって駆け出した。

9

「解毒剤は——!?」
生物準備室に辿り着くなり、矢瀬は深森に駆け寄った。
「あ、矢瀬っち。んふっふー……出来てるわよ。常温で気化する性質があるから、吸いこむだけで効果があると思うけど」
パイプ椅子にのんびり腰掛けた深森が、もごもごとなにかを咀嚼しながら顔を上げる。彼女が膝の上に抱いていたのは、紙皿に盛りつけられたカレーライスだ。
「そ、そのカレーは……」
「お腹空いたって騒いでたら、人工生命体ちゃんが持ってきてくれたの。差し入れだって」
「喰ったんスか!?」
校庭でのパニックを思い出して、矢瀬の表情が強張った。屋台で売られていた惚れ薬入りのカレーのせいで、今、校内は大変な騒ぎになっているのだ。
「そういえば凪沙ちゃんに聞いたんだけど、矢瀬っちって、年上の女性が好きなのよね」
焦りまくる矢瀬を上目遣いに見上げながら、深森が蠱惑的な表情で訊いてくる。
「ちょっ……!? 深森さん。まさかあんたまで……!」
胸の谷間を強調してくる深森の仕草に、矢瀬はむしろ恐怖した。ただでさえ追い詰められているこの状況で、友人の母親の誘惑にまで対応する余力は矢瀬にはない。
しかし深森は、苦悩する矢瀬を見て小さく噴き出し、
「なーんて、冗談よ。冗談。あたしは解毒剤効いてるから」
「で、ですよね……」
安堵のあまり思わず倒れそうになる矢瀬。
「でも、そっちの人工生命体ちゃんはどうかわからないけど……」
「ホ、人工生命体……?」
物憂げに告げる深森の言葉に、矢瀬はハッと周囲を見回した。

生物準備室の薄暗がりの中に、無言で立っていたのはアスタルテだ。深森と同じカレーの皿が、彼女の手にも抱かれている。
「えーと……アスタルテちゃん。もしかして、この惚れ薬って人工生命体にも効く……のか？」
「肯定。命令をどうぞ、旦那様」
いつもと同じ無感動な瞳で、アスタルテが矢瀬を見つめてくる。カレーに溶けこんだMAR製の惚れ薬が、彼女にも効果を発揮しているのだ。
深森はメモを片手に、そんなアスタルテの反応を熱心に観察し、
「なるほど、なかなか興味深い事例ね」
「ちょ……深森さん！　あんた、こんなときまで実験がしたいだけかっ！」
矢瀬が悲痛な叫び声を上げる。アスタルテはそんな矢瀬の前に静かに歩み寄り、
「繰り返します。命令をどうぞ」
「いや、命令と言われても、今はべつに――」
「それは私が必要ないということでしょうか……だとすれば……私の存在価値は……私の……」
「ま、待て！　落ち着け！　そんな思い詰めるようなことじゃねーから！」
自分の両手を見つめて震え始めたアスタルテを、矢瀬は懸命になだめようとした。
なまじ表情が乏しいだけに、アスタルテ自身も惚れ薬による感情の乱れを上手く制御できずにいるらしい。このままでは最悪、精神崩壊を起こして、暴走する危険すら考えられる。
「大丈夫、大丈夫だから、その解毒剤を渡してくれ。な」
幼い子どもに話しかけるように、人工生命体の少女を説得する矢瀬。深森が作った解毒剤は、アスタルテの手の中に握られているのだ。
そして矢瀬の必死の思いが通じたのか、アスタルテがようやく説得に応じようとした、その直後――
「ふふっ……見つけたよ、スイートハート！　さあ、恋人たちの時間を楽しもうじゃないか！」
矢瀬の眼前に実体化して現れたのは、黄金の霧に姿を変えていたヴァトラーだった。
「う、うわあああああっ……！」
迫り来る戦闘狂の青年貴族から、悲鳴を上げて逃げ惑う矢瀬。そんな矢瀬を庇うように、割りこんできたのはアスタルテだった。
「その方に危害は加えさせません。執行せよ、薔薇の指先――」
メイド服を着た少女の背中に、虹色の巨大な翼が広がった。それは一対の巨大な腕へと変化して、ヴァトラーの行く手を遮ろうとする。
「それが噂の人工眷獣か。ほう……面白い！」
思わぬ強敵の出現に、ヴァトラーが嬉々として身構える。彼が撒き散らした魔力の余波で、アスタルテの手から解毒剤入りのフラスコが落ちて転がった。
どうにかフラスコに手を伸ばそうとする矢瀬だが、荒れ狂う魔力に翻弄されて、アスタルテたちの傍には近づけない。

矢瀬は深森に助けを求めようとしたが、彼女の姿はとっくに見えなくなっていた。戦闘に巻きこまれる前に、ちゃっかり生物準備室を脱出したらしい。
「矢瀬、無事かっ！　ヴァトラー、てめえっ！」
遅れて廊下から飛びこんできた古城の存在が、さらに混乱に拍車をかける。
狭い生物準備室の中で、濃密な魔力がぶつかり合い、校舎全体が激しく揺れる。このまま三つ巴の争いが続けば、待ち受けているのは確実な破滅だけだった。そしてなにより最悪なのは、彼らの戦いの原因が、矢瀬の奪い合いにあるという事実だ。そんな馬鹿げた理由で紘神島を沈められたら、正直たまったものではない。
「げ、解毒剤……解毒剤を……！」
ぐったりと床に突っ伏したまま、矢瀬は制服のポケットに手を入れた。取り出したのは数粒のカプセル錠剤だ。
生物準備室の隅っこには、解毒剤入りのフラスコが転がったままである。気化した解毒剤を吸いこむだけで効果が出ると深森は言っていた。つまりフラスコの中身をばらまくことができれば、解毒剤が拡散して古城たちは正気に戻るはずだ。
「くそおおおっ、行け、重気流躰！」
カプセル錠剤を噛み砕いて、矢瀬は自らの能力を発動させた。過適応能力で気流による分身体を作り出し、転がっていたフラスコを叩き割る。
飛び散った液体から白い蒸気が立ち上り、不快な異臭が鼻を突いた。
それを確認したところで、矢瀬は力尽きたように意識を失った。

10

古城が正気を取り戻したのは、それから間もなくのことだった。
「ハッ……オレはいったいなにを……」
荒れ果てた生物準備室を見回して、古城はなにかを思い出したように頭を抱えた。惚れ薬に支配されていた間の出来事も、朧げに記憶に残っているらしい。
床に転がったまま目を開けた矢瀬が、煤けた抜け殻のような笑顔で古城を見る。
「忘れようぜ、今日のことは……オレも忘れる」
「そ、そうだな……」
気まずい表情を浮かべてうなずく古城。それに対してヴァトラーは、むしろ艶やかな笑みを浮かべて、
「ふーん、そうかい？　素敵な思い出が出来たじゃないか」
「おまえも少しは反省しろ！」
そんなヴァトラーを睨んで古城が怒鳴った。
幸いなことに矢瀬がばらまいた解毒剤は、風に乗って学校中に行き渡ったらしい。おかげで校庭での騒動も、沈静化に向かっているようだ。
アスタルテも普段の物静かさな態度を取り戻し、破壊された生物準備室の整理を始めている。

そしてヴァトラーは割れた窓越しに空を見上げて、不敵に笑いながら誰にともなく呟いた。
「ふふっ……まだ終わったわけじゃない。これから始まるのサ。そうだろう――？」

「ちょっと藍羽、今までなにやってたのよ？」
教室に戻ってきた浅葱を待ち受けていたのは、お化け屋敷の受付をやっていた棚原夕歩の叱責だった。すでにＶＲお化け屋敷ツアーの開場予定時刻は、三十分ほど過ぎている。
「あんたがいてくれないと、ツアー始められないんだけど。お客さん、ずっと待たせてたのよ」
「ごめん、棚原。こっちもいろいろあってさ」
言い訳したい気持ちをぐっと呑みこんで、浅葱は素直に頭を下げた。疲れ果てた今の浅葱は、よっぽど酷い顔をしていたのだろう。夕歩もそれ以上は浅葱を責めようとはしなかった。
客引き担当のクラスメイトたちが頑張ったらしく、来場者の数はまあまあだ。教室の前には、順番待ちの長い列が出来ている。
浅葱たちのクラスの出し物は、仮装現実大規模多人数お化け屋敷。暗幕で仕切られた教室内は、それだけではチャチなお化け屋敷ごっこに過ぎない。
しかし教室に設置された幻術サーバーが起動すれば、その光景は一転する。〝魔族特区〟の技術で投影された幻影の世界は、現実とほとんど見分けがつかないのだ。そこで体感できる怪物たちの存在感や恐怖も実物同然。入場者たちはそれぞれが、広大な廃墟に迷いこんだ探索者の気分を味わうことができるのだ。
そしてその幻術サーバーを起動できるのは、今のところ浅葱だけである。
「じゃあ、頼んだわよ、モグワイ」
幻術サーバーのオペレーター席に座った浅葱が、相棒の人工知能に呼びかける。浅葱が装着したヘッドマウントディスプレイに映ったのは、不細工な縫いぐるみ風のアバターだった。その表面にまとわりついた黒い靄が、いつの間にか濃さを増している。
「ああ……わかってる。わかってるぜ、嬢ちゃん」
どことなく邪悪な低い声で、人工知能がギギッと笑った。
その声に、浅葱はかすかな不安を覚えた。言葉にならない違和感に胸がざわめく。ひどく不吉な予感がする。
「……モグワイ？」
警戒する浅葱の呼びかけに、モグワイは長い沈黙で答えた。黒い縫いぐるみの輪郭が、激しいノイズで小刻みに揺れる。冷却ファンの回る静かな音とともに、幻術サーバーが起動する。
世界が書き換えられていく錯覚に、浅葱はかすかな浮遊感を覚えた。
彩昂祭第一日目――
宴の幕が開く時間だった。

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第６巻初回特典付録
ストライク・ザ・ブラッド・アペンド２
彩昂祭の昼と夜
―第二章―

著／三雲岳斗
イラスト／マニャ子
装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）
協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗／アスキー・メディアワークス／PROJECT STB